EFL 学習者のリスニング能力と性格特性

中 村 博 生, 山 本 誠 一[1)]

新潟県立看護短期大学, 宇都宮大学教育学部[1)]

A Study on EFL Learners' Listening Ability and Learners' Personality

Hiroki NAKAMURA, Seiichi YAMAMOTO[1)]

Niigata College of Nursing , Utsunomiya University [1)]

Summary The purpose of this study is to clarify what group of personality traits contributes most to the development of EFL learners' listening abilities. The subjects were ninety-eight freshmen students at a junior college in Niigata prefecture. In the experiment, in order to improve listening abilities, the subjects practiced repetition drills concentrating on sound changes occurring in rapid colloquial English in the Language Laboratory. The experiment was performed from April to October in 1999. According to the results of the Maudsley Personality Inventory by Eysenck, subjects were divided into two groups, extraverts and introverts, and then four groups that were formed by adding the dimension of neuroticism to the dimension of extraversion - introversion. JACET Basic Comprehension Test Form A and B were used to measure the subjects' listening abilities. The scores of the tests were analyzed by ANOVA. The results of this study indicated that in both groups, the extraverts and the introverts, subjects improved their listening abilities significantly from the pretest to the posttest. There was no significant difference in development of the subjects' listening abilities between the two groups. As for the four groups, the subjects in two of them improved significantly in their listening abilities from the pretest to the posttest: the instability - extroversion group, and the stability - introversion group.

要 約 本研究の目的は, EFL (English as a Foreign Language) 学習者が LL (Language Laboratory) 教室において音変化に焦点を置いた反復練習を個別に行った場合, どの類型の性格特性がリスニング能力の向上に貢献できるのかを実験的に明らかにすることである. 被験者は新潟県内の短大の1年生98名であった. 実験期間は, 1999年の4月から10月上旬であった. 被験者は, アイゼンクによるモーズレイ性格検査によって外向性と内向性の2つの類型群に分けられ, 次に神経症的次元を加えて分類される4つの類型群に分けられた. リスニング能力の測定については, JACET Basic Comprehension Test Form A と Form B の結果をそれぞれ事前テストと事後テストとして採用した. 内向性と外向性の類型は, 両群ともリスニング能力は伸びたものの類型間の伸びには有意差はみられなかった. また, 4つの類型群の被験者のテスト結果に対する分散分析では, 不安定性ー外向性と安定性ー内向性の2つの類型群において, リスニング能力が有意に向上したことが明らかになった.

Key words 外向性-内向性次元 (dimension of extraversion- introversion)
神経症的傾向次元 (dimension of neuroticism)
性格特性 (personality trait)
リスニング能力 (listening ability)
反復練習 (repetition drill)

1. 研究の背景

1.1. 外国語学習と学習者の性格類型

第2言語習得の研究分野において，学習者の性格と学力あるいは学習の方法について多くの研究がなされてきた．とりわけ，外向性／内向性が言語学習にどのような影響を及ぼすのか，という点について検討されてきた．しかし，外向性／内向性が，第2言語習得の助けになるのか妨げになるのかは定かではなく，外向性は，一般的な口頭でのコミュニケーション能力の向上に貢献できる要因の一つであるかもしれないが，聞くことや読むことそして書くことに貢献できるかどうかは定かではない（Brown 1987:110）とされている．八島（1997:102）は，日本人高校生を対象とした研究で，教室という学習状況では，外向性／内向性は，学習の結果として英語の学力に直接影響しないようであるとし，内向的な人は，話す・聞く活動より，一人でできる読む・書くことを好むと述べている。このように，外向性／内向性という基準でのこれまでの外国語学習と学習者の性格に関する研究では，外向性の学習者は，仲間とインターラクションを行いながら学習することを好むのでコミュニケーション活動に適しており，内向性の学習者は，一人で学習することが得意なので読むことや書くことを好むといった学習の方法や内容についての適合性が示されてきたといってよい．

ところで，外向性－内向性という性格類型は，ユンクが主張したもので，個体が持つ本能的なリビドーが，外界に多く向かっているか，自分自身の内的な主観的世界に向かっているかによって，性格が異なることを仮定して，前者を外向性，後者を内向性と呼んだ．アイゼンクは，このユンクの仮説から始まり，経験的に検討された，相互に相関が高い特性の集まりとしての「外向性－内向性」という性格次元を採用し，神経的傾向とともに，性格記述のための主要次元とした（杉山 1996:10）．この性格次元の考え方を基にしたモーズレイ性格検査(MPI)について岩崎（1996:44）は，教育の場面で大いに役立っている事実を，過去の研究報告に触れながら述べている．さらに岩崎は，「以上に述べた研究は，学業，クラブ生活，学生生活の維持，専攻の決定などの指導，相談に神経的次元・外向性次元および両者の組み合わせの重要性を示唆するものといえよう」とし，外向性－内向性次元と不安定性－安定性次元（神経症的傾向次元）の組み合わせによってできる4つの類型を基準とした分析方法を提案している．このことは，外向性－内向性次元が主たる基準であった外国語学習と性格に関する研究に，性格の類型を細分化するという観点を加え，モーズレイ性格検査の有用性をさらに高めるものと考える。

1.2. リスニング能力と性格特性

Rost（1991:7）はリスニング能力向上のための原則的な学習活動として，4つの学習の型を提示している．すなわち，面と向かってのコミュニケーションを行うこと，目標言語で意味に注意を払い新しく重要な内容を学ぶこと，聴解力向上のための活動の学習をすること，そして正確さへの注意と形態の分析をすることである．また，彼はリスニングの成功を目指した有効な学習活動を展開するには，学習者にとって有効であると思われる性格特性を言語活動の方法とともに述べている．例えば，注意深さ（attentiveness）は理解することのために必要な条件（Rost 1991: 21）で，さらにメッセージの言語形態を正しく理解するためには集中的に（intensively）聞くことが言語習得にきわめて重要な側面である（Rost 1991:49）としている．また，最初の段階は，情報を予測するための活動的な（active）過程としてのlisteningが重要である（Rost 1991: 81）とし，さらにペアでのインターラクションでは，聞き手は継続的に（continuously）新しい情報を聞き分けなければならない（Rost 1991: 121）などとしている．

Rostの主張するリスニング能力向上に効果的な学習の型に貢献できる学習者の性格特性は，アイゼンクの性格特性図(図1)(杉山 1996:11)では，どの類型に属するかを検討してみる．相手とのコミュニケーションを行うために有効な性格特性としては，外向性に属するものが該当すると思われる．さらに，個々の特性に言及すれば，不安定性と外向性の間では，「楽観的」や「能動的」が該当すると思われ，外向性から安定性の間の性格特性では，「愛想がよい」，「社交的」，「多弁」，「物わかりがよい」，「陽気」，などが挙げられる．目標言語で意味に注意を払い新しく重要な内容を学ぶことにおいては，安定性から内向性の間の，「冷静」，「おちついた」，「考え深い」，「注意深い」などが挙げられる．聴解力向上のための学習活動をすることでは，「能動的」(不安定性－外向性)や「まじめ」(内向性－不安定性)が挙げられる．正確さの重視と形態の分析では，安定性－内向性における

「冷静」や「おちついた」,「考え深い」や「注意深い」などが挙げられる．また，リスニングを成功させるための学習活動を行う場合に有効であると思われる性格特性では，「注意深い」や「能動的」，「まじめ」などという性格特性が挙げられる．このように，リスニング能力向上のためにプラスの影響をもたらすと思われる性格特性は，アイゼンクの性格特性図によれば，4つの類型のいずれかに散在しているようである．

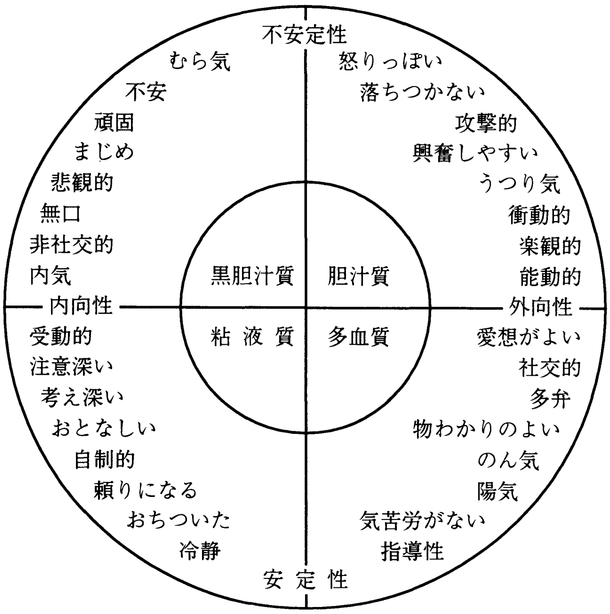

図1. 四つの気質(内円)に関するガレヌスの性格理論と、性格構造(外円) についての近代の実験的統計的研究の結果を示す。(Eysenck,1964.iv)

(杉山 1996:11)

1.3. LL 教室における個別学習

リスニング能力を構成する三つの構成要素の技術(Rost 1991:4) を活性化することによって，音変化を伴う速い口語体のモデル文を反復練習することは，EFL 学習者がリスニング能力を向上するために効果的であることが実験的に明らかにされた（中村 2000:65 - 78)．この研究では，学習者は LL 教室において個別学習を行うことが主たる学習活動であった．LL 教室での個別学習では，「LL（A-A-C 型）の長所は，例えば聴き取り教材の場合に,自己のペースに応じた聞き直し（つまり“くりかえし”）ができることである.」(浅野 1995:147) とあるように，学習者は自分のペースでモデル文を繰り返し聞き，かつ反復練習することになる．つまり，この学習形態では，他とのインターラクションを行うことはない．また，学習内容では，音変化を伴う速い口語体を正確にそのまま繰り返すためには，音声学に関する知識（単語の音，音変化，イントネーションなど）や注意深い反復練習が必要である．さらに，リスニング能力向上に結びつくためには，意味を正しく理解する力が必要とされるので単語の意味や文法の知識，文脈を理解する力，背景の知識などが必要とされる。

2. 研究の目的

本研究の目的は，EFL 学習者が LL 教室において音変化に焦点を置いた反復練習を個別に行った場合，どの類型の性格特性がリスニング能力の向上により貢献できるのかを実験的に明らかにすることである．

3. 実験方法

3.1. 被験者

被験者は，新潟県内の短期大学の 1 年生 98 名である．

3.2. 実験材料

(1) プリテスト

実験に先立ち，被験者のリスニング能力が等質であるかどうかを測定するために，標準化されたリスニングテスト（金子，Kelly 1995:26-30）をプリテストとして用いた．

(2) 学習事前テストと事後テスト

学習の効果による被験者のリスニング能力を測定するために，JACET Basic Listening Comprehension Test（梶木:1989）の Form A を事前テストとして，Form B を事後テストとして使用した．

(3) 学習教材

処遇での視聴覚教材は，N.B.C.（National Broadcasting Co.）の TV 番組 2 作（Vortex:1993）を使用した．

3.3. 実験手順

実験期間は 1999 年度の前期で，プリテストと事前テストは 4 月下旬，事後テストは 9 月上旬の授業で行った．処遇にあたる学習は,5 月から 7 月までの 8 回の授業で実施した．モーズレイ性格検査（MPI）は，10 月上旬に実施した．これらのテスト,検査，そして処遇は全て LL 教室で行った．

3.4. 1 レッスンの学習活動と指導の内容

学習活動は 5 段階からなる．被験者は最初に 5 分から 10 分のビデオを視聴する．彼らは英語と日本語

で書かれてあるスクリプトを見ながら視聴することができる．次にブーステープレコーダーにより，練習のためのモデル文を各自のカセットテープに3分程度録音する．3段階目には，モデル文について速い口語体の英文の聞き方や発音の仕方を学習する．例えば，Did you run away from home? であれば，ビデオでは速い口語体で発音されているので，[didʒu rʌnəweifrəmhoum?] のように，音声学上の音変化（同化，連結，弱化など）を知識として学習し，かつ発音できるように練習する．4段階においては，録音した自分のテープを再生して速い口語体の文をできるだけテープの音に近づけるように口頭で反復練習をする．そして，最後の段階で，被験者はもう一度ビデをを見て，学習したモデル文を聞き取れるかどうかを確認する．

3.5. 採点方法

プリテストは，素点（20点満点）をそのまま用いた．また，事前テストと事後テストは，JACET Basic Listening Comprehension Testの採点結果の素点（40点満点）をそのまま採用した．

3.6. 分析方法

(1) 被験者をモーズレイ性格検査によって外向性と内向性の2類型に分け，両群のリスニング能力のテスト結果について分散分析（2×2の混合計画）により分析した．第一の要因は性格検査の結果による外向性と内向性であり，第二の要因は事前テストと事後テストの結果の素点であった．

(2) 被験者をモーズレイ性格検査によって不安定性－外向性，外向性－安定性，安定性－内向性，内向性－不安定性の4つの類型に分けた．各類型におけるリスニング能力のテスト結果について分散分析（一要因被験者内の分散分析）により分析した．

4. 結果

4.1. モーズレイ性格検査の結果

(1) 内向性と外向性

表1 外向性の被験者と内向性の被験者の人数

外向性の被験者	68
内向性の被験者	30
合　計	98

(2) 4つの類型（A群：不安定性－外向性，B群：外向性－安定性，C群：安定性－内向性，D群：内向性－不安定性）の被験者の人数

表2 4つの類型の被験者の人数

A群：不安定性－外向性	25
B群：外向性－安定性	43
C群：安定性－内向性	18
D群：内向性－不安定性	12
合　計	98

なお，被験者がどの類型に属するかという基準は，N尺度（神経症的傾向）とE尺度（外向性）ともに得点の24を境界とした（アイゼンク 1997:14）．

4.2. 外向性の被験者群と内向性の被験者群のリスニング能力向上に関する分析

(1) 両群の等質性：実験に先立ちプリテスト（標準化されたリスニングテスト）の得点を基に分散分析を行った結果，外向性の被験者群と内向性の被験者群のリスニング能力に有意差は無く（$F\langle 1, 96\rangle = 0.69$），両群は等質であることを確認した（表3，表4）

表3 プリテストの平均値と標準偏差

類型群	人数	平均値	標準偏差
外向性の被験者群	68	13.84	2.30
内向性の被験者群	30	14.27	2.37

表4 プリテストの結果の分散分析表

要因	SS	df	MS	F
条　件	3.82	1	3.82	0.69
個人差	529.09	96	5.51	
全体	532.91	97		

(2) 両群のリスニング能力の向上に関する分散分析：外向性の被験者群と内向性の被験者群のリスニング能力を，事前テストと事後テストの結果を基に分散分析（2×2の混合計画）によって分析した結果，テストの主効果に有意差が認められた（$F\langle 1, 96\rangle = 14.95$）ものの，条件とテストの間の交互作用には有意性は認められなかった（表5，表6）．

表5 事前テストと事後テストの平均値と標準偏差

	事前テスト		事後テスト	
被験者群	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
外向性	20.10	5.42	21.25	5.40
内向性	20.57	5.62	22.77	4.57

表6 テストの結果の分散分析表

要因	SS	df	MS	F
条 件 (A)	40.82	1	40.82	0.82
個人差 (S)	4807.10	96	50.07	
テスト (B)	116.60	1	116.60	14.95**
A×B	11.54	1	11.54	1.48
S×B	748.66	96	7.80	
全体	5724.72	195		

+p<.10 *p<.05 **p<.01

4.3. 4つの類型群（A群：不安定性－外向性，B群：外向性－安定性，C群：安定性－内向性，D群：内向性－不安定性）におけるリスニング能力の向上に関する分析（一要因被験者内の分散分析）

(1) A群（不安定性－外向性）の分析：A群においては，事前テストと事後テストの間に有意差（F〈1, 24〉= 6.34, p<.05）が認められた（表7, 表8）.

表7 テストの平均値と標準偏差

テスト	人数	平均値	標準偏差
事前テスト	25	18.84	6.35
事後テスト	25	20.28	6.39

表8 テストの結果の分散分析表

要因	SS	df	MS	F
テスト	25.92	1	25.92	6.34*
個人差	1932.32	24	80.51	
残 差	98.08	24	4.08	
全体	2056.32	49		

+p<.10 *p<.05 **p<.01

(2) B群（外向性－安定性）の分析：B群においては，事前テストと事後テストの間に有意差（F〈1, 42〉= 1.23）は認められなかった.（表9, 表10）.

表9 テストの平均値と標準偏差

テスト	人数	平均値	標準偏差
事前テスト	43	20.84	4.65
事後テスト	43	21.58	4.81

表10 テストの結果の分散分析表

要因	SS	df	MS	F
テスト	11.91	1	11.91	1.23
個人差	1519.23	42	36.17	
残 差	405.09	42	9.65	
全体	1936.23	85		

(3) C群（安定性－内向性）の分析：C群においては，事前テストと事後テストの間に有意差（F〈1, 17〉= 8.82, p<.01）が認められた.（表11, 表12）.

表11 テストの平均値と標準偏差

テスト	人数	平均値	標準偏差
事前テスト	18	20.67	5.58
事後テスト	18	23.61	4.51

表12 テストの結果の分散分析表

要因	SS	df	MS	F
テスト	78.03	1	78.03	8.82**
個人差	775.81	17	45.64	
残 差	150.47	17	8.85	
全体	1004.31	35		

+p<.10 *p<.05 **p<.01

(4) D群（内向性－不安定性）の分析：D群においては，事前テストと事後テストの間に有意差（F〈1, 11〉= 1.12）は認められなかった（表13, 表14）.

表13 テストの平均値と標準偏差

テスト	人数	平均値	標準偏差
事前テスト	12	20.42	5.68
事後テスト	12	21.50	4.37

表14 テストの結果の分散分析表

要因	SS	df	MS	F
テスト	7.04	1	7.04	1.12
個人差	546.46	11	49.68	
残 差	69.46	11	6.31	
全体	622.96	23		

5. 本研究の制約

本研究では，実験期間の関係で，全ての学習を終了した後に約一ヶ月半の夏季休業があり，その後に

事後テストが行われた．事後テストのためにカセットテープを活用して家庭での学習ができるようにした．この間の家庭学習の質や量の個人差が実験結果に影響すると考えられるが，その影響は4月から7月までの学習期間で起こり得る家庭での学習の質や量の差と同様に，被験者の性格に影響されるものと考える．

6. 考察

モーズレイ性格検査の結果による外向性の被験者群と内向性の被験者群のリスニング能力に関する分析について述べる．実験に先立ち行われたプリテストにおいて，両群間のリスニング能力に関して差が無かったので，両群は等質であったといえる．学習の前後に行われたリスニングのテストでは，分散分析の結果テストの主効果のみに有意差が認められた．このことは，外向性の被験者と内向性の被験者は，LL教室での個別学習で，音変化に関する反復練習をとおして，英語のリスニング能力を向上させはしたもののその程度に差が無かったということである．すなわち，外向性と内向性は，本実験の学習ではリスニング能力への貢献度が同程度であったということになる。

次に，アイゼンクの性格特性図を基に，4つの類型に分けた被験者群のリスニング能力に関する分析について述べる．A群（不安定性－外向性）の類型に属する被験者群では，事前テストと事後テストの得点の平均点間に有意差が認められた（$F\langle 1, 24\rangle = 6.34$, $p<.01$）．したがって，不安定性－外向性における性格特性をもつ被験者は，リスニング能力に向上がみられたといえる．B群（外向性－安定性）では，同様のテストにおいて有意差が認められなかった．したがって，外向性－安定性における性格特性をもつ被験者は，リスニング能力に向上が認められなかったといえる（$F\langle 1, 42\rangle = 1.23$）．C群（安定性－内向性）では，同様のテストにおいて有意差が認められた（$F\langle 1, 17\rangle = 8.82$, $p<.01$）．したがって，安定性－内向性における性格特性をもつ被験者は，リスニング能力が向上したといえる．最後にD群（内向性－不安定性）であるが，同様のテスト結果の分析では，有意性が認められなかった（$F\langle 1, 11\rangle = 1.12$）．したがって，内向性－不安定性における性格特性をもつ被験者は，リスニング能力の向上が認められなかった．これら4類型群の分析結果を総合すると，A群とC群の性格特性は，リスニング能力の向上に貢献できたといえる．しかし，B群とD群の性格特性は，リスニング能力の向上にプラスの影響を与えることができなかったことになる．

本研究の学習活動の中心は，被験者が個別に20分間程度ヘッドフォンをして外界の影響を受けずに，モデル文を聞きそして口頭で繰り返すという反復練習である．被験者は速い口語体のモデル文を，正確に意味を確認しながら口頭で反復練習することに努力しなければならない．学習の目的は相手とのコミュニケーションではあるが，テープレコーダーを操作しながら一人で練習することになる．比較的おちついて，まじめに，一定の時間継続的に行わなければ効果的とはいえない。学習内容では，音声学的な知識や単語の意味，文法の知識などを駆使してモデル文の意味を正確に理解することが要求される。これらのことを考え合わせると，本研究の実験結果から，リスニング能力を向上させたA群(不安定性-外向性)とC群（安定性－内向性）の被験者が，どのような性格特性をもっている可能性があるのか考えてみる．A群では，「楽観的」や「能動的」な性格特性がリスニング能力の向上に貢献しやすいと考えられるが，「怒りっぽい」，「落ちつかない」，「攻撃的」，「興奮しやすい」，「うつり気」，「衝動的」などの性格特性も，同じ類型にあるので，リスニング能力向上にプラスの影響をもたらすという可能性は否定できないと思われる．同様にC群では，「冷静」，「おちついた」，「自制的」，「考え深い」などが貢献すると思われるが，「おとなしい」や「受動的」なども貢献しているという可能性は否定できないことになる．

7. 教育的示唆と今後の課題

本研究は，EFL 学習者が LL 教室において音変化に焦点を置いた反復練習を個別に行った場合，どの類型の性格特性がリスニング能力の向上に貢献できるのかを明らかにすることであった。つまり，英語の4技能のうちリスニング能力のみを取り出し，どの性格特性がこの能力の向上にプラスの影響をもたらすかを実験的に検証した．本実験の結果から，特定の性格特性をもつ学習者が，リスニング能力を向上させることができると一般性を導くことは難しい．しかし，実験結果より，今回のような学習の方法が，特定の性格特性をもつ学習者に適していたとすれば，

この指導で採用したLL機器，学習形態，指導内容，教材などを他の性格特性をもつ学習者にも適合するように調整することは可能である。そうすることにより，より多くの学習者にリスニング能力向上のための学習の機会が与えられることになると思われる．今後は，スピーキング能力向上に貢献できる性格特性を学習の方法とともに実験的に明らかにし，さらに学習者の性格とコミュニケーション能力の向上に関する研究を行いたいと考えている。

引用文献

アイゼンク，H.J.:モーズレイ性格検査手引，MPI 研究会／訳編，誠信書房, 1997.

浅野博：教育・英語・ LL ―考え方と実践―，リーベル出版，1995.

Brown, H. D. : Principles of Language Learning and Teaching, Second Edition. Prentice Hall, 1987.

岩脇三良： モーズレイ性格検査の開発と適用，MPI 研究会編，新・性格検査法―モーズレイ性格検査―第 2 章，誠信書房，24～54，1996.

梶木隆一：JACET Basic Listening Comprehension Test, 開拓社，1989.

金子朝子，Craig A.Kelly：英検準 2 級完全模試，26～30，1995.

杉山善朗：アイゼンクの性格理論，MPI 研究会編，新・性格検査法―モーズレイ性格検査―，誠信書房，1～23，1996.

Nakamura, H. : The Effect of Two Different Kinds of Repetition Drills on Japanese EFL Learners' Listening Ability: The Careful Colloquial Style and the Rapid Colloquial Style with Sound Changes. 大学英語教育学会，紀要，第 31 号，65～78，2000.

N.B.C.： Punky Brewster, California Dreams, Vortex, 1993.

Rost, M. : Listening in Action, Prentice Hall, 1991.

八島智子：外向性，内向性と外国語学習に関する一考察 ―アメリカに留学する高校生の調査より―，LLA 紀要，1997.